天童市 DC契機にまちづくりの機運上昇

座談会～山形DC開幕目前、天童市の観光を考える～

ほほえみの宿滝の湯 女将
山口 隆子 氏

天童市観光物産協会 会長
天童温泉協同組合 理事長
伊藤 彰 氏

日本観光振興協会 理事長
見並 陽一 氏

天童市長
山本 信治 氏

生産量日本一の将棋の駒とラ・フランス、さらには、温泉、サクランボなどで知られる山形県天童市。山形デスティネーションキャンペーン（6月14日～9月13日）を控え、観光振興への機運が高まっている。山形DCを契機とした観光の活性化策について語り合ってもらおうと、天童市長の山本信治氏、天童市観光物産協会会長（天童荘社長）、ほほえみの宿滝の湯女将の山口隆子氏に加え、アドバイス役として日本観光振興協会理事長の見並陽一氏に集まっていただいた。（司会は平塚眞喜雄・観光経済新聞社東北支局長、天童市の天童荘で）

ポストDCの施策が重要
自立した推進組織確立を
「天童織田」ブランドへ
市民の元気が地域の光に

山本 **見並** **伊藤** **山口**

――山形DCの開幕が近づいてきた。

山本　山形DCの開催は、10年ぶり6回目となる。サクランボのシーズンに重なり、天童市の観光にはとても重要なキャンペーンだ。市としてもさまざまな予算を観光振興に付けて、広告宣伝やイベントを展開しているが、官民挙げた取り組みが大切になる。山形県が「おもてなし山形県観光条例」を制定したが、その条例には、県民の総参加、全産業の参加によって観光立県の実現を目指すことがうたわれている。天童市もまさにその通りで、観光事業者だけでなく、各種団体、市民の皆さんの協力を得て、山形DCを成功に導きたい。

伊藤　今回の山形DCはこれまで以上に地元関係者の機運が高い。以前は、「誰かがやっているDC」という部分が少なからずあったが、今回は多くの方が「DCに合わせて何かやろう」という意識を持っている。皆さんが一生懸命にさまざまな取り組みを進めているので、天童観光の活性化にはとてもチャンスだ。DCでの誘客に成果を上げ、DC後の観光にも生かせるようにしたい。

山口　山形DCには、昭和57年の「紅花の山形路」観光キャンペーンから関わっている。山形DCの回数を重ねるごとに観光に対する地元の意気込みが熟成されてきた。観光の重要性や素晴らしさを多くの人々が心にとめるようになった。地域間、産業間の連携も芽生えつつある。地元の良さを発信しようという気持ちが強くなってきたと感じている。

――山形DCへの具体的な取り組みは。

山口　山形県内の旅館・ホテルが「やまがた朝ごはんプロジェクト」を4月に始めた。ご飯に合うおかずを温泉地ごとに考案して宿泊客に提供する企画だ。山形県は何と言っても米がおいしい。全国の食味ランキングでは山形県産の4銘柄が最高ランク「特A」の評価を受けている。それだけおいしい米をさらに引き立てるおかずを出す。天童温泉では、特別に豪華なおかずではないが、温泉の湯から作った塩などを使った「ご縁ですよ～赤しそふりかけ～」を提供している。

もちろん朝ごはんだけでなく、温泉、サクランボ狩り、新緑の美しい景観を楽しんでもらいたい。DC期間中には、縁結びのパワースポットとして女性に人気となっている鈴立山若松寺の仏像の特別公開もある。周辺観光を含めてぜひ天童にお越しいただきたい。

――見並理事長はJR東日本の出身だが、DCの意義とは。

見並　DC自体の位置づけが以前とは大きく変わっている。かつては、名所旧跡を含めて日本各地の観光資源がまだまだ知られていない時代だった。山形DCで言えば、山寺だとか、最上川の舟下りだとか、そういう観光資源を全国の人々にPRするキャンペーンだった。ところが、今は違う。旅行の主流も団体から個人へと移った。また、自治体にとっても観光が地域活性化策の切り札になった。自分たちの地元には名所旧跡はないが、何とか観光客を呼び込みたいという時代になった。そうなるとDCを開催する上で地域の観光振興が大きな課題になってきた。DCは、観光キャンペーンという誘客事業ではあるが、新たな観光資源の発掘や住民の意識改革を含めたまちづくりのお手伝いという部分への期待が大きくなっている。

山本　おっしゃる通りだ。DCの開催期間中には多くの観光客に来てもらわなければならないが、私たち行政や観光関係者が考えるべきはDCの後をどうするか。つまりポストDCが課題だ。DCの成果や反省点をその後に生かすことが大切になる。観光素材の磨き上げ、おもてなしのさらなる向上などいろいろな要素があるが、要は今後のまちづくりにいかにつなげるかだ。これが最も難しい課題でもある。

見並　山形県は、名所旧跡、景観、食、おもてなしなどを含めて他県より恵まれた観光資源を持っている。DCを開催すれば、毎回成功して一定の観光客が来る。しかし、ややもすればDCの成功に満足してしまい、早く次のDCを招致しようとなってしまう。天童もこの縮図のようなところがある。交通機関や観光施設などの観光インフラが整い、天童と言えば、将棋の駒、温泉、サクランボを思い浮べる人も多く、消費者に観光のイメージが認知されている。周辺には山寺、蔵王などの有力な観光資源もある。だからDC期間にがんばるだけでも、それなりに成果が上がる。しかし、ポストDCの取り組みはどうだったか。天童の観光ブランドを高めるには、皆さんが言うようにポストDC、DCを契機としたまちづくりが重要だ。

――天童の観光まちづくりの現状は。

伊藤　山形DCに向けた情報発信の強化の取り組みの一環で、観光まちづくりの基本コンセプトと、PRに使用する新しいキャッチコピーを決めたところだ。基本コンセプトは、豊かな観光資源に磨きをかけ、天童の宝にしようという思いを込めて「無限の『持ち駒』を、天童の宝に」とした。新キャッチコピーは「湯のまち天童　あなたの旅に、王手」に決めた。

どちらも将棋の駒にちなんだフレーズにしたのだが、観光物産協会や温泉組合で議論した結果、これまでの情報発信では、根本となる部分がもう一つ伝わっていなかったという反省が出された。なぜ将棋の駒なのか、なぜ人間将棋というイベントがあるのか。その根本にあるのは天童織田藩の歴史、文化だ。天童と織田との関わりをきちんと掘り下げて、骨太の基本に据えようという方向性が見えてきた。

そのためにも織田の歴史、文化を市民一人一人がきちんと語れるようにしたい。先日、天童織田藩に関わる市内の寺社、建勲神社、三宝寺、観月庵（妙法寺）、佛向寺の関係者に集まってもらい、いっしょに織田を語ろうという会合を開いた。その中で、それぞれの寺社の行事などを織田のストーリーを基に連動させて情報発信しようという話もあった。また、観光物産協会では、織田をテーマにしたまち歩き用のマップの製作に着手したところだ。

山口　天童織田藩の歴史、文化をまちづくりに生かそうという機運は、地元の間で高まってきている。温泉旅館や商店街の若手らが中心となって立ち上げた「天童織田プロジェクト」がその一つ。信長の商業振興策にちなみ、駅前通りでフリーマーケットや食のイベントを行う「楽市楽座」を昨年始めたところ好評だった。また、天童市麺類食堂組合は、天童織田藩の将軍家への献上品にそばがあったことから「献上そば」を名産にしようと、賞味会などのほか、建勲神社に献上そばを奉納する行事を行っている。この他にも、天童織田藩と縁がある浮世絵の歌川広重、織田有楽斎に始まる有楽流茶道などをまちづくりに生かしたいという動きもある。

見並　地域の歴史、文化を再認識し、観光に生かそうという機運は素晴らしい。織田をコアブランドにすると、歴史、文化を基軸に、イベントだけでなく、まち歩きも、食も、織田をテーマにしないとならない。武将をはじめ歴史を観光誘客のテーマにする動きは各地にあるので、天童ならではの他所にない魅力を凝縮したまちづくりが必要になってくる。

山本　織田というテーマをより鮮明にして、人間将棋のあり方を見直すこともできる。今の形態が完成形とは思っていない。一昨年、「人間チェス」が行われているイタリアのマロスティカ市に行った。天童市とは姉妹都市の関係にあるが、ここの人間チェスは3時間ぐらいかけて芝居風の仕立てになっていた。人間将棋もさらに天童らしい見応えあるストーリーに仕立てられるかもしれない。大胆なアイデアを出してもらい、みんなで議論したい。

人間将棋にしても、楽市楽座にしても、さらに魅力的なイベントにするには連携が鍵となる。団体の連携を強化し、市民を挙げて盛り上げる必要がある。こうした連携や機運づくりをどのようにリードしていくか、これは行政の課題の一つと認識している。

見並　連携の強化は不可欠だ。団体間、産業間を連携させ、その利害を調整したりする過程で、観光資源というのは磨き上げられていく。連携を促進するには、市長がおっしゃったように行政のリードも重要だが、民間に母体となる推進組織が欠かせない。観光協会でもいいし、団体間、産業間に横串を通すことができるのであれば、どんな組織でもいい。まちづくりのマネージメントを担う組織、つまりDMO（※注釈）だ。推進組織を決めて、財源的にも補助金に依存しない自立した仕組みをつくらないと、将来を見据えた持続的なまちづくりにはならない。

伊藤　観光振興にいろいろなアイデアが芽生えるようになってきたが、土台づくりはこれからの課題だ。まちづくりの推進組織、団体間の連携の強化に関しても、DCをきっかけに進めることができればいい。天童市の宝、オンリーワンを官民挙げて作り上げる態勢を整えたい。

――まちづくりには、人材の育成も必要だ。

山本　新しいアイデアとしては、昨年12月、県立天童高校に「観光学科」を新設するよう求める要望書を県と県教育委員会に提出した。カリキュラムのあり方や指導教諭の育成、就職先の確保など、解決すべき課題が多いことは県から指摘されたが、地元関係者の人づくりへの機運は高い。見並理事長をはじめ外部の知恵もお借りしながら継続的に取り組んでいきたい。

見並　大学に観光系の学部、学科などが増えたが、地域が求める人材の育成は十分とは言えない。これには産官学の連携が必要だ。地元の高校に観光学科ができれば、地域の活性化につながる可能性もある。参考になると思うのは、「高校生レストラン」としてテレビドラマにもなった三重県多気町の相可高校の事例。食物調理科の生徒たちが運営する「まごの店」のオープンが話題となり、入り込みの増加や売り上げアップなど、地域の活性化につながった。こうした全国の事例を研究したらいい。観光学科新設は、産官学が連携した観光地域づくりの試みとしておもしろい。市民挙げて賛成となれば、県も動くかもしれない。

――最後に、山形DCを契機とした観光活性化への意気込みをお聞きしたい。

伊藤　天童織田藩について話したように、地域の歴史、文化をしっかりと天童観光の根本に位置づけたい。DCの機運の高まりを上手に活用し、これからの天童観光のあるべき姿を探っていく。観光はまちづくりに尽きる。多くの関係者を観光振興、まちづくりに引き込んでいけるようにしたい。

山口　市民みんながその気になり、DCのイベントに参加したい、まちづくりに加わりたいと思うようにしたい。先日の天童桜まつりの際、地域住民でつくるグループに旅館の女将も参加して、「天童温泉嚬子」を組み合わせたメドレーの曲を合唱して披露した。みんなの思いが一つになり、とても楽しかった。そんなことでも参加意識を共有できる。何よりも住民が天童を愛し、みんな仲良くやれることが大事。仲良くできれば、元気が出て、地域のあらゆるものが光出す。そうした光を観光客を引き寄せる力にしていきたい。

山本　山形DCにはしっかりと取り組む。その上でDC終了後には、広告宣伝事業を含めて効果をきちんと検証し、次の観光施策に生かしていく。行政として心強く感じるのは、旅館や商店街では、若い世代の活躍が目立つようになってきたこと。楽市楽座などのイベントのように、若い世代を中心に異業種間の連携がうまく取れるようになってきた。行政としても積極的に観光振興をリードしながら、こうした民間の動きを天童のまちづくりの力にしていく。観光の活性化に向けて、引き続き関係者の協力をお願いしたい。

※DMO　Destination Marketing（またはManagement）Organizationの略。観光地域のマーケティングやブランディング、資源管理、品質管理などを担当する組織。観光集客の中核を担う。

天童市の観光キーワード

「観光学科」の新設要望

県に要望書を提出

天童市の山本信治市長、天童市観光物産協会の伊藤彰会長をはじめ天童市の農業協同組合、商工会議所の代表者らは昨年12月、山形県の吉村美栄子知事と菅野滋教育長に、県立天童高校に「観光学科」の新設を求める要望書を提出した。

県庁に吉村知事を訪ね、山本市長が「観光振興はまさしく地域振興と人づくりであり、観光学科の新設をお願いしたい」と要請。伊藤会長も「観光の一番のファクターはおもてなし力を強化すること。優れた人材の育成のために学ぶ場所が必要だ」と訴えた。

観光学科の新設には、カリキュラムの作成や指導者の確保、卒業後の就職の受け皿など課題は多いが、天童発のアイデアとして注目されている。

朝ごはんプロジェクト

鈴立山若松寺

「ご縁ですよ」

山形県では、県産の米と各地域の特色を生かしたおかずを旅館・ホテルが朝食に提供する「やまがた朝ごはんプロジェクト」を展開中。天童温泉では、天童市内の縁結びスポットとして知られる鈴立山若松寺にちなんだ「ご縁ですよ～赤しそふりかけ～」が味わえる。

「ご縁ですよ」は、参拝者が赤いものを身に着けて良縁を願ったという若松寺の言い伝えを基に考案した特製のふりかけ。天童温泉の湯から作った塩「ご塩ですよ」と、赤シソをミックスしている。山形のおいしいご飯が何杯でも食べられると好評だ。

息づく天童織田藩の文化

人間将棋

▶建勲神社

天童は織田家ゆかりの土地だ。織田信長の次男、信雄の血筋を引く織田家は、江戸時代に入ると、小幡藩（群馬県甘楽町）を治めた後、高畠藩（山形県高畠町）に国替えとなり、天童もその領地になった。1831（天保2）年には、藩主の信美が拠点を天童に移し、天童織田藩が成立した。

天童市内には信長を祀った建勲神社がある。明治3年、天童藩知事の織田信敏が舞鶴山の山頂に建立し、明治17年に現在地である山の麓に移された。一方、市内にある三宝寺は織田家の菩提寺。信長をはじめ歴代藩主の位牌が収められており、位牌堂には信長の肖像とされる画が飾られている。

生産量日本一の将棋の駒の生産も、天童織田藩の時代に発祥を持つ。幕末、藩財政の再建、藩士の生活救済のため、家老の吉田大八が奨励したのが駒の製造だった。駒の製造は伝統的な工芸として今に受け継がれている。その駒にちなんだ春の恒例イベント「人間将棋」は全国的に有名だ。

また、市内にある広重美術館も織田家との縁で開設された。浮世絵師、歌川広重が天童織田藩の依頼を受けて大量の肉筆画を描いたことにちなむ。現在、天童市近郊で確認できる作品はわずかだが、一連の作品群は「天童広重」と呼ばれる。